



Title	愛のヒエラルキー：『妖精の女王』第三巻・四巻一考
Author(s)	溝手, 真理
Citation	Osaka Literary Review. 1988, 27, p. 25-36
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25519">https://doi.org/10.18910/25519</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 愛のヒエラルキー

——『妖精の女王』第三巻・四巻一考——

溝 手 真 理

## ( I )

15世紀にフィレンツェで起こった新プラトン主義と呼ばれる思想運動には、神秘主義へ向かう傾向がはっきりと読み取れる。ルネサンス期において魔術や神秘主義、オカルトが重要視されたということは、本来のプラトン哲学とは路線が異なっていることを示している。新プラトン主義の中心人物である Marsilio Ficino と Giovanni Pico della Mirandola の著作には、多くのオカルト的英雄や、その教義に対する言及がふんだんに含まれている。Pico の『人間の尊厳について』と題された演説において、オカルトは、

... abounding in the loftiest mysteries, embraces the deepest contemplation of the most secret things, and at last the knowledge of all nature.<sup>1)</sup>

とされており、オカルトの技あるいは術は正しく探究される限り自然哲学の完成だとされている。そして、その完成を獲得した者を‘magus’と呼び、

... as the farmer weds his elms to vines, even so does the *magus* wed earth to heaven, that is, he weds lower things to the endowments and powers of higher things.<sup>2)</sup>

とした。又、その獲得行為こそが哲学であり信仰であるとし、哲学と宗教の統合を為し遂げようとしたのである。

John Mulryan は、“The Occult Tradition and English Renaissance”の中で、新プラトン主義者達があらゆるオカルト哲学を自分達の解釈の中に持ち込んだ為に、彼らのプラトン解釈はオカルトに満ち、そして彼らの

議論はプラトン哲学とキリスト教、さらにはあらゆるオカルト哲学の折衷もしくは統合を目指すような形になっていると分析している。

さらに Mulryan は、

... Ficino, in addition to presenting Elizabethan and Jacobean writers with the definitive Neo-Platonic interpretation of love and beauty, inundated his Platonic commentaries with the atmosphere of the occult.<sup>3)</sup>

と述べて、エリザベス朝やジェームズ朝の文学作品において、新プラトン主義的愛や美の解釈の影響が見られた場合、それらは同時にオカルトの影響も受けていることを示唆している。

『妖精の女王』第三巻・四巻には様々な愛が描かれている。この二つの巻は話の展開及び登場人物同志の関り合いからしても、ひとまとまりの巻と見なすことに問題はないと思われる。スペンサーは新プラトン主義の影響を受けている代表的なエリザベス朝の詩人である。とすれば、第三巻・四巻にオカルトの影響が見出される可能性が高い。本稿では『妖精の女王』第三巻・四巻における「愛」に関して、オカルトの観点から考察し、さらにはスペンサーの「愛」を新プラトン主義の観点から考察してみたい。なお、Mulryanが前述の論文の中でオカルトを次の様に四つのカテゴリーに分類している——

1) ピタゴラスやカバラ等の反啓蒙的な伝統に拠っている。2) 隠された真理を明瞭に言い表わすことをせず、無知な大衆による誤解を避けている。3) 魔術師あるいはオカルト哲学者によってのみ説明可能な逆説や矛盾で表わされる宇宙の神秘への非伝統的信仰。4) 全ての存在するものの間に神秘的な連鎖関係を設ける。本稿ではオカルト的な要素を抽出するにあたり、この四つのカテゴリーのいずれかにあてはまることを基準とした。

『妖精の女王』とオカルトとの関り合いについて分析した代表的な批評に A. Fowler と Frances A. Yates のものがある。<sup>4)</sup> Fowler はピタゴラスの数の神秘を、そして Yates はキリスト教的カバラを利用して『妖精の女王』

の各巻の主題を設定している。いずれもスペンサーとオカルトの関連を示すには十分な批評であり興味深い。ただ両者とも非常に観念的で本稿とは趣を異にする。本稿においては、より具体的に、話の筋の上でオカルトを追ってみたい。

## (II)

事の発端はブリトマートが“glass”の中のアーテガルとの恋におちたことにあった。この“glass”は“a world of glass”であり、又、“the world it selfe” (3. 2. 19)<sup>5)</sup> のようであった。この“glass”は鏡ではなく、水晶の玉のことだと思われる。当時は占い師に水晶玉を透視させて未来を予言させることが流行していた。<sup>6)</sup>つまり、水晶玉の予言力は一般に知られていたのである。予言は最も典型的なオカルトの技であり、予言者という媒介は必要だが、隠された真実を知る直接的な手段であった。

水晶玉はその予言力を象徴するとともに、カバラにおいて全てのものを包み込む宇宙卵の象徴として知られている。<sup>7)</sup>宇宙卵の中では全ての物質が創造主なる一者の光を反射していると解釈されている。ブリトマートが見たのは“th' only shade and semblant” (3. 2. 38.) だった。“shade”も“semblant”も光と関りの深いことばである。実体が光を反射しない限りかげをつくることはない。つまり、この世にアーテガルが実体として存在することを意味しているのである。“No shadow, but a bodie hath in powre: / That bodie, wheresoeuer that it light.” (3. 2. 45.) というグローシーの言葉はそのことを示唆しているのである。アーテガルが実際に存在し、力を振るっているからこそブリトマートはそのかげを水晶玉の中に認めることができたのである。

さて、不思議な恋の為に身も心もやつれ果てたブリトマートを心配した彼女の乳母は、“Magitian” (3. 3. 25.) マーリンのもとへ彼女を連れていく。そして、マーリンは彼女が水晶玉で見た不思議を解明してやり、さらに新たな予言を与える。そこですっかり立ち直った彼女は、夫となるべきアー

テガルを捜して旅に出ていくことになる。この場面の言葉使いにひとつの特徴が見られる。“euill”, “remedee”, “leach craft”, “leaches skill”, “redrest”, “ill”, “euill”, “infest”, “cause” (3.3.16-8) というように、病気や医業に関連した単語が多用されているのである。これは魔術師マーリンに、ブリトマートの病を治す医師の役割が与えられていることを示す。マーリンはブリトマートの病の真の原因を知っており、納得のいく説明を与えて、彼女の心の惑いを取り除いてやった。すなわち、真実を解き明かす者に医師の役割があてがわれているのである。ブリトマートに打ち倒されて半死半生になったマリネルは、フロリメルに恋をして再び瀕死の状態となる。そのマリネルの病の真の原因を見抜いたのはアポロ神であるが彼は“King of Leaches” (4.7.25.) であるという。ここでも真実を解き明かしたのは医師とされているのである。

キャンベルとトライアモンドの話にはオカルト的要素が多く折り込まれている。三兄弟の母親は息子達の運命を知り、運命の女神達に奇妙なことを願い出た。

Then since (quoeth she) the terme of each mans life  
 For nought may lessened nor enlarged bee,  
 Graunt this, that when ye shred with fatall knife  
 His line, which is the eldest of the three,  
 Which is of them the shortest, as I see,  
 Eftsoones his life may passe into the next ;  
 And when the next shall likewise be annex  
 Vnto the third, that his may so be trebly wext. (4.2.52.)

この願いは聞き届けられ、長兄プライアモンドの魂は彼の肉体の死とともに次兄ダイアモンドの肉体へと移った。ところがダイアモンドの首が切り落とされて生き続けるのに不適當になってしまった為に、二人の魂はそろって末弟のトライアモンドの肉体へ移った。こうしてキャンベルと戦うトライアモンドは三つの魂を持つ存在となった。死者の魂が生前自分に近し

かった人間の内へ入り、やり遂げるこのできなかったことを人の体を貸りてやろうとするという構想は「転生」と呼ばれ、カバラにおいて長く論議されてきた問題である。<sup>8)</sup>最終的には「転生」は存在するという方向で意見の一致をみている。というのは、次の様な聖書の箇所を説明する為には「転生」を認める他はないからである。

兄弟が一緒に住んでいて、そのうちのひとりが死んで、子のない時は、その死んだ者の妻は出て、他人にとつてはならない。その夫の兄弟が彼女の所にはいり、めとつて妻とし、夫の兄弟としての道を彼女につくさなければならない。  
申命記25：5

死んだ夫の魂は共に住んでいた兄弟の肉体に入り、自分が夫として果たすべき義務を果たそうとする。故に、その兄弟が残された妻を娶らなければならないのだという論理が成立するわけである。『妖精の女王』における三兄弟の話も転生によると理解がしやすい。キャンベルの妹キャナセーを娶るという目的を三人掛かりで果たそうとしているのである。

この三兄弟の敵であるキャンベルは、勿論、勇敢で優れた男であったが、彼の強さには秘密があった。彼に絶対的な自信と希望を与えていたのは、妹から贈られた指輪だったのである。この指輪には命を奪う程の傷であっても血止めする力があつた。従つて、キャンベルはこの決闘において不死身であつた。指輪というのは古代の昔から “attainment”, “perfection”, “immortality” の象徴とされており、<sup>9)</sup> ここで登場したキャンベルの指輪も、それを身に付けた者に肉体の不死を提供する魔法の指輪なのである。

魔法の指輪を持ったキャンベルと三つの魂を持ったトライアモンド、この二人のオカルト・ヒーローの奇妙な決闘はキャンピーナという名の美しく若い女性の出現により終止符を打たれる。ここで注目したいのはキャンピーナの手をしている杖である。

In her right hand a rod of peace shee bore,  
About the which two Serpents weren wound,

Entrayled mutually in louely lore,  
 And by the tailes together firmly bound,  
 And both were with one oliue garland crownd,  
 Like to the rod which *Maias* sonne doth wield,  
 Wherewith the hellish fiends he doth confound. (4. 3. 42)

この杖の上部についている二匹の蛇の飾りは実に変わった姿をしている。この二匹の蛇は、体を湾曲させて互いの尾を絡め合っている。そして、その姿は指輪の形と類似している。一般にオカルトの伝統の中で、指輪は一匹の蛇が自分の尾を口に加えて丸くなっている姿に例えられる。両者とも終わりも始まりも持たない。あるいは終わりが始まりであって、だからこそ両者とも不死を象徴するのである。キャンベルの魔法の指輪は傷を癒す力を持っている。キャンビーナの杖は果たしてどのような力を持っているのか。

But when as all might nought with them preuaile,  
 Shee smote them lightly with her powerfull wand.  
 Then suddenly as if their hearts did faile,  
 Their wrathfull blades downe fell out of their hand,  
 And they like men astonisht still did stand. (4. 3. 48.)

彼女の杖は、心からにくしみや怒りを一瞬のうちに除去する働きがあったのである。そして、最終的に彼女は争う心を癒したのである。蛇の巻きついた杖と言え、マイアの息子ヘルメスの杖のことであり、それは医業の象徴である。<sup>10)</sup> キャンビーナもこの争い合う二人の本来あるべき姿—真実—を解明する医師なのである。

以上、論じてきたことを整理すると、ブリトマート、マリネル、トライアモンドの三者が各々愛を手に入れる過程に共通のパターンがあることが分かる。ブリトマートは水晶玉による予見によってアーテガルとの恋におちる。そして、身も心も死の一步手前までにやつれ果てた彼女を治療したのは魔術師マーリンである。プロテウスの予言によって、結果的に愛の為

に身も心も苦しみぬいたマリネルに処方而降したのは医師の王アポロである。トライアモンドは運命の女神達の予言の故に三つの魂を有することになり、その為に二度の死を体験した。もう後がない彼は、そこで愛の為にくしみに取り付かれた心を、医業のシンボルであるヘルメスの杖に似た物を持つキャンビーナによって癒される。マーリン、アポロ、キャンビーナの三者は、皆愛の為に苦しむ者を癒した愛の医師達なのである。

## (III)

Most sacred fire, that burnest mightily  
 In living brests, ykindled first aboue,  
 Emongst th'eternall spheres and lamping sky,  
 And thence poured into men, which men call Loue;  
 Not that same, which doth base affections moue  
 In brutish minds, and filthy lust inflame,  
 But that sweet fit, that doth true beautie loue,  
 And choseth vertue for his dearest Dame,  
 Whence spring all noble deeds and neuer dying fame :

Well did Antiquitie a God thee deeme,  
 That ouer mortall minds hast so great might,  
 To order them, as best to thee doth seeme,  
 And all their actions to direct aright;  
 The fatall purpose of diuine foresight,  
 Thou doest effect in destined descents,  
 Through deepe impression of thy secret might,  
 And stirredst vp th' Heroes high intents,  
 Which the late world admyres for wondrous monuments. (3. 3. 1-2)

ここでスペンサーは新プラトン主義的な愛の階層の観念を用いている。天上の愛、人間の愛、獣の愛の三層に分けて区別しているのである。<sup>11)</sup>そして、天上の愛が人間の心に注ぎ込まれて、初めて「愛」と呼ばれるところ



となり、古代の人々がそれを「神」と呼んだとつながりをつけている。つまり、天上の愛と神の同一視を暗示しているのである。ここはプラトンの哲学とキリスト教が統合されているような形になっており、非常に新プラトン主義的色彩が濃い。第三巻、四巻では、神の目的が愛の力によって形を為していく具体例が、ブリトマート、マリネル、トライアモンドの三者の行為によって描かれていると考えられる。何故なら、彼らを翻弄したのも愛であり、又、彼らが各々の苦痛や労苦に立ち向かって目的を実現できたのも愛の力なのだから。

第三巻、四巻において予言が重要な役割を果たしていることは既に述べたが、各予言の性質をここで検討してみたい。プロテウスはマリネルの不幸な未来を予言した。その不運を避けさせようとマリネルの母親は彼に女性との交際を断たせる。しかし、結果的には予言通りにマリネルは見知らぬ猛き女性によって打ち倒されてしまう。つまり、プロテウスは真実を予言し、避けられぬ運命をマリネルに予告したのである。三兄弟の母親が、息子達の命を延ばしてくれるようにと運命の女神達に頼んだ時、女神の一人であるラケシスは、

Fond dame that deem'st of things diuine

As of humane, that they may altred bee,

And chaung'd at pleasure for those impes of thine.

Not so; for what the Fates do once decree,

Not all the gods can chaunge, not Ioue him self can free. (4. 2. 51)

と言って、運命が絶対のものであることを断言している。ブリトマートは、マーリンの予言の中で、自分の夫が若くして死んでしまうことになっている悲劇的な結末に関しても聞いている。乙女がまだ実際に会ったこともない自分の未来の夫に若くして先立たれることを知っているのである。凄絶な事情である。それでも彼女はアーテガルを捜す為に旅立っていった。それは、ブリトマートが水晶玉の中にアーテガルを見たことが“the streight course of heavenly destiny” (3. 3. 24) だったからである。三者は予言通り

に歩いていくよう運命づけられているのである。予言には逆らわない、あるいは逆らえない設定になっているのである。すなわち、ここで取り上げた予言は「預言」であり、実際に起こるとをそのままに伝えるという性質を持っているのである。

三者の上に働いた愛の力は天上の生まれを持つ正しき愛であった。故に彼らの行動は正しく導びかれた。その導き手はマーリン、アポロ、キャンビーナの三人の愛の医師、天界の医師達であった。天界の医師の導きにより三者はその進むべき方向へと歩いていき各々の愛へと到達することになるのである。ただし、各人が掌中に納めた愛には差がある。マリネルは後にフロリメルと結婚することになる。彼は最も限定された意味においての愛、つまり、異性愛を手に入れ、その結晶とも言える結婚に達することになるのである。トライアモンドは異性愛を得て、伴侶を手に入れるが、同時にキャンベルとの永遠の友情という友人愛を得ることになる。ではブリトマートはどうであろうか。彼女はアーテガルと結婚することにより異性愛を得る。又、レッドクロス・ナイトを筆頭に多くの勇敢な騎士や立派な婦人達との友情を築いていくことで友人愛も得る。しかし、彼女にはもうひとつ別種の愛が与えられている。

マーリンの予言によれば、ブリトマートがアーテガルと結ばれることにより歴史上名だたる人物が彼らから生まれ、そして、遠い将来ブリトンの再盛がもたらされることにすらなっている。だから、天の意志に任せて然るべき手立てを尽くして運命を実現せよとマーリンは言う。しかし、彼女自身がその運命から得られるものは、辛く長いものになること必定のアーテガル捜しの旅と、束の間の幸せ、そして、夫の早世というどん底の悲しみである。しかも、そのどれもが将来のことであって、保証も確証もない状態で彼女はスタートしなければならないのである。聖書に次の様な一節がある。「(愛は)すべてを忍び、すべてを望み、すべてに耐える。」(コリント I, 13:7)ブリトマートの取った態度はこの通りではないだろうか。通常この聖書の箇所「愛」に相当する英語は“charity”であり「慈愛」を

意味する。彼女がマーリンの言葉を信じて行動を起こさねば、そしてアーテガルと結婚できなければ、歴史は狂い、その中で生まれるはずの英雄も、起こるはずの事件も全てが無に帰し、いく世代にも渡って多くの人々が迷惑し、平和を失うことになるのである。ブリトマートの行動は神の計画が成就する為のものであり、己れの見返りよりも、自分とは直接に関りを持たぬ人々への愛、さらには神に対する愛の証しなのである。

『妖精の女王』第三巻、四巻を新プラトン主義的観点から検討する前に、新プラトン主義の二大特徴をここで再び呈示したい。まず第一にプラトン哲学とキリスト教があらゆるオカルトの要素ともども融合されているということ、第二に魂が宇宙のヒエラルキーを上昇していき、最終的に一者と合一することにより不死を得るという思想を持つということである。第三巻、四巻に現れたブリトマート、トライアモンド、マリネルの各々の愛は天界の摂理によって正しい愛の支配下にあり、天界の意志を代行する者により導びかれる。肉体的及び精神的に極限にまで達していることが三者が無理なく彼らの運命を受け入れる基盤となっているのである。又「異性愛」、「友人愛」、「慈愛」はヒエラルキーを為しているように受け取ることができる。「愛の敵」であったマリネルは恋する者の苦しみを哀れむことにより異性愛をまず覚えた。異性愛を正しく認識していたトライアモンドに必要だったのは友人愛を正しく知ることであった。そして、慈愛を知るブリトマートは慈愛を形に表わす前に異性愛と友人愛を知ることになっている。スペンサーの「愛のヒエラルキー」は新プラトン主義的な愛の段階の思想とは決定的な相異点を有している。上昇志向を重んじる余りに地上の愛を軽視してしまうプラトン主義に対して、スペンサーの「愛のヒエラルキー」では地上の愛が重要なのである。慈愛は異性愛と友人愛を越えてしまった所にあるのではなく、異性愛と友人愛を合わせ持っているところになければならないのである。異性愛を知らぬ者が友人愛を知ることではなく、友人愛を知らぬ者が慈愛を知ることもない。ブリトマートの活動はそのことを語っているのである。スペンサーが結婚や子孫を残すことを強調する傾向

にあると言われることは、実にこの「愛のヒエラルキー」の解釈により説明がつく。スペンサーにとって異性愛は、より高次元の愛に進んでいく為に欠くことのできない通り道なのである。又、ブリトマートの場合は殊に顕著なのであるが、結婚して子孫を残すことが神の目的の実現であり、その実現に貢献する行為が神への信仰の証しであることもあり得るのである。ブリトマートがアーテガルを捜すという行為は、彼女が慈愛を認識する為の第一歩であり、第三巻、四巻は彼女が異性愛、友人愛を知って慈愛の段階へと上昇していく過程を描いた物語なのである。そして、スペンサーは愛のヒエラルキーによって地上と天上を結びつけた愛の *magus* なのである。

## 注

- 1) Giovanni Pico della Mirandora, "Oration of the Dignity of Man," trans. Elizabeth Livermore Forbes, in *The Renaissance Philosophy of Man*, ed. Ernst Cassirer, Paul Oskar Kristeller, and John Herman Randall Jr. (Chicago: Univ. of Chicago Press, 1948) p. 248.
- 2) *Ibid.*, p. 249.
- 3) John Mulryan, "The Occult Tradition and English Renaissance Literature," *Bucknell Review* 20 (1972), p. 57.
- 4) Cf. Alastair Fowler, *Spenser and the Numbers of Time* (London: Routledge and Keagan Paul, 1964); Frances A. Yates, *The Occult Pyilosophy in the Elizabethan Age* (London: Melbourne and Henly, 1979), Chap. 9.
- 5) 『妖精の女王』からの引用はすべて Edmund Spenser, *The Faerie Queene*, ed. A. C. Hamilton, Annotated English Poets Series (London and New York: Longman, 1977) に拠る。
- 6) See *Edmund Spenser's Poetry*, ed. Hugh Maclean (second edition; New York: W. W. Norton & Company, 1982), p. 217n.
- 7) Cf. Manly P. Hall, *An Encyclopedic Outline of Masonic, Hermetic, Qabbalistic and Rosicrucian Symbolical Philosophy* (California: The Philosophical Research Society, 1977), p. 117.
- 8) Cf. Z'ev ben Shimon Halevi, *Kabbalah* (London: Thames and Hudson, 1979), p. 86.

- 9) Cf. Hall, *op. cit.*, p. 100.
- 10) Cf. *Ibid.*, p. 88.
- 11) Hamilton はスペンサーがここで “heavenly love”, “human love”, “bestial love” というよく知られた新プラトン主義的な区別を用いていると解釈している。See, Hamilton. *op. cit.*, p. 326n